

研修Ⅰ 若い教師のための基礎・基本講座Ⅲ 国語科授業のサードステップ

「目的意識のある言語活動における書くことの指導」

～単元「4年生に伝えよう！私たちの委員会活動」（東京書籍5年）を通して～

1 学習指導要領から、付けたい力を明確にする。

何を見るのか？教科書・指導書等・・・どれを見てもよいが「学習指導要領」は必ず見て、そこから付けたい力を明確にすることが大切である。

目的意識のある言語活動における「書くこと」の指導をするときには、まず、学習指導要領解説 国語編「B書くこと」の指導事項を見る。アからカまでの指導事項の中から、どこを指導したいのかを学級の実態から見極めていく。（指導例として「イ 構成に関する指導事項」にしぼって説明を進める。）

「イ 構成に関する指導事項」の中の「自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えること」から付けたい力を考えた場合

↓

（学習指導要領解説 国語編）

「自分の考えを明確に表現する」ための構成とは、自分が考えていることを明確にすることだけではなく、相手が書き手の考えを明確に理解できるようにすることにも留意しなければならない。

（中略）

それぞれの段落の内容としてどのようなことを書けばよいのかを考えたり、自分の考えを一貫して述べたりすることなどに注意することが必要である。

上記のように、さらにくわしく指導事項の重点が書かれているので、そこを読んで、指導することを明らかにすることが大切である。

付けたい力

↓

自分が伝えたい委員会の仕事について、どのような構成で書けば、相手に伝わりやすいか考える力

↓

どのような内容を、どの順で、どのくらいの量で、どのような見出しや資料を使って、位置づけるのかが重要である。

2 付けたい力にぴったりの言語活動を設定する。

どんな言語活動がふさわしいか目的意識（相手意識）を大切に、実態に応じて教師が見極めることが大切である。

【演習】

自分が伝えたい委員会の仕事について、どのような言語活動を設定すれば、この力が付くのか。その理由についても考える。

上記の課題について参会者がアクティブラーニングを実施。

ポイント「付けたい力と言語活動がぴったりか吟味すること。」

- ① 一人で考える。
- ② グループで考えて意見を出す。

出てきた意見（例）リーフレット、ポスター、新聞、紙芝居、絵本等

【言語活動の吟味】

- ・ 委員会活動 Q&A ブックを作って伝える

→ 構成ができあがってしまっているので、構成を考えさせることができない。

- ・ 委員会活動についての発表会を行う
 - 発表原稿を考えるとという点では構成を考えることになるかもしれないが、「話す・聞く」という活動が中心になるので付きたい力にぴったりとしていない。
- ・ 委員会活動の壁新聞を作る
 - 構成を考えるとという点では合っているが、新聞は事実を伝えるものであり、教えるという内容とはそぐわない。
- ・ 委員会活動のリーフレットを作る
 - 構成を考慮することができ、教えるという内容ともぴったりの言語活動である。このように、なぜリーフレットがよいのか、教師は自分の中で言えるようにしておいてほしい。

3 言語活動を単元を通して位置付ける。

言語活動を単元を通して位置付けるとは、

単元	一次	→ めあてを作る（学習の見通しをもつ）
	二次	→ リーフレットを作る（学習の目標に向かって言語活動を進める）
	三次	→ 伝える場（言語活動のまとめ）

このように、言語活動が続くようにすることである。

どう書けばよいか分からないときは、教材にもどること、つまり、学習の目的達成のためには、教材と自分のリーフレットを行き来することが重要なのである。児童がつまずくと予想されるときには、教科書教材に加えて自作教材を作り提示したい。

例として、リーフレットの4ページの構成を考える。そのためには、比べるものが必要である。ただ「教科書はこうなってる。だからこのように書こう。」では教科書教材のよさも分からないし、構成を考えたいとはいえない。構成を変えた自作教材を提示し、比べさせることで、「相手（4年生）に自分の考え（委員会活動）を理解してもらいやすい構成にするにはどうすればよいか。」「やはりこの構成がいい。自分のリーフレットの構成はこうしよう。」と納得して、児童自身でリーフレットの構成を決めて書き進めることができる。

児童の考えの「ずれ」から「なぜ」が生まれ、話し合う中で構成のよさに気付くことができる。そうして、書くことも明確になっていく。

さらに、分かりやすく伝えるための工夫を見付け、自分はどの工夫が使えるか考える段階では、「グラフ」「写真」「キャッチフレーズ」「目立たせたい所は大きく」などの工夫が考えられる。どこに何を加えれば、相手に自分たちの活動が伝わるかを考えさせることが重要である。児童の「考えたい」「やりたい」という気持ちを教師が受け止め、活動しやすくすることが大切である。

- 例
- ・ 工夫を見つけさせるために、様々なリーフレットを置いておく。
 - ・ グラフを使いたいという児童に、自作教材を提示し教科書教材や実物などと比べさせる。いろいろなグラフを紹介し、一番自分が伝えたいことが相手に伝わりやすいのはどれか考えさせるようにする。

大切なのは、学級の児童の実態から、児童に付きたい力を見極め、どんな言語活動が合うかを考えること

子どもたちに力を付けさせたいと思う気持ち

である。

子ども理解と教材研究を大切にして指導してほしい。